

アニメで知る心の世界

こもれば心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：空の青さを知る人よ

今回のテーマ

きょうだいトラウマとエディプスコンプレックス

はじめに

「空の青さを知る人よ」は、両親の突然の死という喪失体験を経て、年の離れた姉妹であるあおいとあかねの関係が、本来の姉妹関係から親子関係（保護者と被保護者）へと変容していく物語である。この過程で生じた姉妹間の情緒的葛藤は抑圧されたまま、あおいは成長を続ける。

高校3年生となり成人への移行期を迎えたあおいの中で、長年抑圧されてきた情緒的葛藤が再浮上する。この変化の過程で生じる心理的葛藤、特にあおいの内面に芽生えるあかねへの競争心、劣等感、そして罪悪感、まさにきょうだいトラウマの典型的な症状として理解することができる。そこにあかねの元恋人である慎之介が帰郷し、今まで置き去りにしてきた様々な感情と向き合うことになる。

今回、きょうだいトラウマとエディプスコンプレックスという概念を通して本作品で描かれている、きょうだい関係の複雑さと、そこに生じる喪失からの離脱・再建の過程について考察していきたい。

今回のテーマ

I. きょうだいトラウマの理論

II. あおいの発達過程における退行と再挑戦

III. 「しんの」の象徴的意味とエディプスコンプレックス

IV. 慎之介の喪失と都市での挫折

V. 三者それぞれの「再生」の物語

VI. まとめと「井の中の蛙」の多層的解釈

I. きょうだいトラウマの理論的背景

1) ジュリエット・ミッチェルの「きょうだいトラウマ」

ミッチェルによれば、きょうだいトラウマは独特な心理的構造を持っている：

- **同等性と差異の矛盾**：きょうだいは「同じ家族の一員」でありながら「異なる個体」であるという、同等性と差異の矛盾を内包した存在である。この矛盾が、きょうだい関係における根本的な不安定さを生み出している。
- **排除される恐怖**：きょうだいトラウマの中核には、心理的に「消去される」「愛情を失う」という排除される恐怖が存在する。これは物理的な死への恐怖ではなく、関係性の中で自分の存在価値が否定され、親や重要な他者からの愛情を失うことへの深い不安である。
- **競争と愛情の葛藤**：きょうだい関係では愛する対象との競争という矛盾した感情が生じる。親や家族への愛情を共有しながらも、同時にその愛情を巡って競争しなければならぬという、相反する感情の共存がきょうだいトラウマの特徴的な側面となっている。

ここでミッチェルが提唱する「母の法」の概念が重要となる。

「母の法」と「父の法」の対比

きょうだい関係は水平的な関係性であり、それは平等、共存、分かち合いという原理に基づいている。これは、ラカンが言う「父の法」—言語に開かれるエディプスコンプレックスにおける父と子の垂直的関係—と対比される。

「父の法」は、父親を中心とした象徴的秩序、言語体系、社会規範への参入を表す。子どもは父親という権威を通じて、「ノン (Non)」という禁止の言葉、すなわち法と秩序を学ぶ。これは垂直的な階層関係であり、子どもは父を通じて言語と象徴界に入っていく。

一方、「母の法」は、より原初的で重要な禁止を含んでいる。新しいきょうだいが生まれると、幼い子どもは自身が排除される恐怖を感じ、新しいきょうだいを殺そうとする心性が生じる。しかし、母はこの殺意を禁止する。この禁止こそが「母の法」の核心である。母親の愛情や注意は限られた資源であり、きょうだいはそれを分かち合わなければならない。ここから仲間集団という水平的社会世界性が始まるのである。

「母の法」には明確な階層や言語化された規則はなく、むしろ共存と妥協、嫉妬と連帯という矛盾した感情が混在する領域である。それは言語化以前の、より原初的な関係性の次元を扱っており、平等、共存、分かち合いという水平的な社会関係の基盤となっている。

きょうだいトラウマは、この水平的な関係性における平等と差異の葛藤から生じるものであり、垂直的なエディプス的關係とは異なる次元の心理的課題を提示している。

アニメでの幼い時のあおいは4歳であり、この時点では既にきょうだいトラウマの要素（あかねへの羨望や競争心）が存在していたと考えられる。

2) あおいとあかねの関係性の変遷

相生あおいは、あかねの妹で本作品の主人公。学校での交友関係は少なく、一人でベースの練習に明け暮れている。確固とした将来像はなく、漠然と東京でバンドで天下を取ることを夢見ているが、この背景には秩父での息苦しさから逃れたい思いと、上京すれば成功できるという万能空想がある。

相生あかねは、あおいの姉で慎之介の元恋人。両親の事故死により、慎之介との東京行きを断念し、地元の市役所に就職してあおいを育てている。気立てが良く地域との交流も積極的だが、その完璧な人格であるが故にあおいの心理的葛藤を助長させている。

幼児期には、あおいはあかねに対して自然な対抗心や羨望を抱いていた。慎之介からベースの指導を受け、「でっかくなったら、うちのベースな」と言われたことで、姉には届かない場所でバンドメンバーになれるという幻想を抱き、あかね・慎之介・あおいのエディプスの三角関係が存在していた。しかしあおいは、まだ4歳であったため、あかねや慎之介との関係の中で大きな問題が生じることはなく、たとえあおいがそのような感情を抱いていたとしても、幼い子が考えるファンタジーとして暖かく受け止められていたと考えられる。エディプスの三角関係は、まだ顕在化する前の潜在的な段階に留まっていた。

両親の死後、生存と安全確保のため、あおいはあかねとの母子的二者関係を選択した。この選択により、慎之介への感情を抑圧せざるを得なくなった。それゆえに、これまで好きであった慎之介に対して、しんのがあかねを東京に誘った際、「あか姉つれていくな！」と反発することになった。この反応には、あおいの複雑な感情—慎之介への憧れ、あかねへの依存、三角関係への恐怖—が入り混じっていたが、それらは幼いあおいによって抑圧されていくこととなった。

現在、あかねと同年齢になり、抑圧してきたエディプス葛藤が再燃してきている。その抑圧してきたものが、言語化されないまま表在化し、あおいは息苦しさを感じるようになった。秩父での生活に対する息苦しさは、まさにこの内面的な抑圧の投影でもある。またあかねと「同じ大人の女性」として比較されることで競争心と劣等感が再浮上するが、この葛藤を否認するように刹那的に上京を考えており、その背景には躁的防衛の心性が存在している。

3) 「殺される恐怖」の現れ

あおいが感じる「あかねと比較して自分が劣っている」「あかねの方が優秀で愛される存在」という認識は、心理的な「排除される恐怖」として現れている。これは物理的な死への恐怖ではなく、関係性の中で自分が無価値になり、愛情や承認を失う恐怖である。

この恐怖の根源は、両親を失った直後の体験にまで遡ることができる。当時幼かったあおいにとって、あかねは文字通り生存を支える唯一の存在であった。もしあかねに見捨てられれば、再び絶対的な孤独と喪失に直面することになる。この根深い不安が、あおいの無意識に刻み込まれているのである。

現在、高校2年生となったあおいは、これまでの「保護される妹」から「対等な大人の女性」へと立場が変化する中で、この古い恐怖が再活性化されている。あかねの完璧さ—地域での人望、自制心、責任感—と自分の未熟さを比較することで、「自分はあかねに劣る存在であり、やがて愛情を失うのではないか」という不安が頭をもたげてくる。

さらに、あおいは自分があることであかねの人生設計を狂わせてしまったという負い目を抱えており、この罪悪感が排除される恐怖を一層深刻なものにしている。愛されるべき存在でありながら、同時に相手の人生を制約する存在でもあるという矛盾した自己認識が、あおいの心を複雑に苦しめていると考えられる。

II. あおいの発達過程における退行と再挑戦

1) 適応的退行の意味

高校卒業直後のお堂の前であかねとしんのが話し合っていたところに、幼いあおいが割って入っていったシーンを取り上げたい。

あかね：私はいけない

しんの：なんで……

しんのは大事な人から裏切られたような痛々しい悲しい顔をしている。

しんの：どうしてだよ！？ 約束しただろ、一緒に東京の専門学校にいくって！

しんのはあかねの両肩を掴む

しんの：なあ、約束しただろ？……あかね！！

あかねはうつむき肩を震わせている。そんな二人の姿をあおいは大きな木の陰からそっと見ていたが、突然二人のところに走り寄り、あおいはしんのに殴りかかる。

あおい：あか姉いじめんな！！ バカァ！！ あか姉つれていくな！！ バカァ！！ デブ！！

後ろから殴りかかってきたあおいに少し驚いた表情でしんのは言う。

しんの：俺は体脂肪率7パーだぞ！！

あおい：うるさい、バカァ！！猿！！ゴリラ！！あか姉つれていくな！！

あかね：ちょっとあおい

そうあかねは言う、興奮し殴り続けるあおいをしんのから引き離す。

あか姉とあおいは、ぜったい 一緒なんだからあぁっ！！

その後も興奮し続けるあおい。その姿にあかねとしんのも呆然と眺めていた……。

【考察】

両親を失った幼いあおいが、エディプス葛藤に直面する心理的準備ができていなかったことは明らかである。突然の喪失によって心理的な支えを失ったあおいにとって、あかねとの二者関係への退行は生存戦略としての適応であった。複雑な三角関係や競争心といった高次の心理的課題に取り組むよりも、まずは基本的な安全と愛情を確保することが最優先となったのである。それゆえ、このシーンであおいは上記のような言動を行ったと考えられる。

また、この退行は発達的には必要な過程でもあった。十分な安全感を獲得することなしには、健全な心理的成長は望めない。あおいは一時的により幼い発達段階に戻ることで、失われた安全基地を再構築し、心理的な土台を固め直そうとしていたのである。

さらに、この二者関係への退行は一時的な問題解決としても機能していた。慎之介を含む複雑な三角関係を回避することで、あおいは当面の心理的安定を維持することができた。エディプス的な競争や葛藤は、より成熟した段階で再び取り組むべき課題として、一時的に棚上げされたのである。このような適応的退行は、圧倒的な喪失体験に対する自然で合理的な防衛機制であったと言える。

2) 抑圧された感情の蓄積

しかし、この退行的解決は同時に様々な心理的代償を伴っていた。まず、慎之介という父親的存在への憧れが抑圧されることとなった。幼いあおいにとって慎之介は理想的な男性像であったが、あかねとの安全な関係を維持するために、この感情は意識から排除される必

要があったのである。

また、あかねとの競争心についても否認が働いた。本来であれば自然に生じるであろう姉への対抗意識や嫉妬心は、生存に必要な保護関係を脅かす危険な感情として、あおいの心の奥底に押し込められた。

一方で、あおいはあかねに対して退行的で子供じみた反抗的な態度を取るようになった。直接的な対立は避けながらも、わがままを言ったり、素直でない態度を示すことで、抑圧された感情の一部を表現していたのである。これは、安全な依存関係の中で許される範囲での反抗であり、あおいの心理的バランスの取り方であった。

これらの抑圧された感情は、完全に消失したわけではなく、あおいの音楽への情熱という形で昇華されながらも、内面に蓄積され続けていたと考えられる。音楽という創造的な活動を通じて、言葉にできない複雑な感情を表現し、心理的なバランスを保とうとしていたのである。

3) 高校2年生という転換点

大学進学を控えたあおいは、初めてあかねと「同じ大人の女性」として比較される立場に立つこととなった。この転換期において、あおいの自己認識は複雑で矛盾したものとなっていく。

あおいから見たあかねは、完璧で地域に愛され、常に自制心を保つ理想的な大人の女性である。一方で自分自身については、直情的で人との関わりが苦手な未熟な存在として認識している。さらに、自分がいることであかねの人生設計を壊してしまったという深い負い目も抱えており、この罪悪感があおいの自己評価をより一層低下させている。

このような自己認識の背景には、複雑な内面の葛藤が存在している。あかねへの深い感謝の気持ちと、同時に芽生える競争心が混在し、あおいの心を混乱させている。また、大人として自立したいという憧れがある一方で、あかねに依存していることの安心感も手放し難く、この相反する感情があおいを苦しめている。

これらの葛藤から逃れるように、あおいは上京への逃避願望を強めている。秩父という閉鎖的な環境から離れ、東京という理想化された場所で新しい自分になりたいという思いは、現実の複雑な感情と向き合うことを避けたいという心理的防衛の現れでもある。

そのような中で町おこしのために来た、大物演歌歌手の新渡戸団吉と共にバックバンドのギターとして金室慎之介が現れ、あおいそしてあかねの抑圧してきた思いが再び持ち上がってくる。

バックバンドの慎之介は、以前のようなキラキラとして生き生きとした青年ではなく、何か物憂げで様々なジレンマを抱えた一人の大人の男性になっていた。そんな現在の慎之介の姿に、あおいとあかねはそれぞれ失望にも似た複雑な感情を抱くのである。それと同時に高校生の姿をした生き霊ともいふべき「しんの」があおいが練習していた御堂に姿をみせるのである。